純愛

瀬戸内晴美長編選集……第二巻

純愛

瀬戸内晴美長編選集　第二巻

講談社

瀬戸内晴美長編選集　第三巻—純愛
昭和四十九年一月二十八日第一刷　昭和五十三年一月二十日第五刷
著者—瀬戸内晴美　造本—杉浦康平＋海保透　発行者—野間省一
発行所—株式会社講談社　東京都文京区音羽二—十二—二十一　郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五—一一一一(大代表)　振替東京八—三九三〇
印刷所—豊国印刷株式会社・株式会社興陽社　製本所—黒柳製本株式会社
乱丁本・落丁本はお取り替えいたします。
定価—一一〇〇円
©瀬戸内晴美　昭和四十九年　Printed in Japan

0393-284033-2253（2）　(文1)

瀬戸内晴美長編選集——第三巻

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

瀬戸内晴美長編選集　第三巻　目次

純愛――5
ブルーダイヤモンド――347

純愛

女讃歌

約束の時間にはまだ四十分余りあった。いつでも時間より先に行って待つのは自分の方だと北見慧子は思う。

行く手の銀行のビルの壁に白っぽく光っている電気時計の数字を仰ぎながら、一度くらいは待たせてやりたいと彼女は思いをめぐらした。いらいらしながら待っている須山竜夫の様子を、物かげにひそんでこっそり五分くらい観察してやったら、どんなに胸がすくかしら。慧子は、そんな竜夫の表情を想像しただけで、思わず微笑が浮んできそうな頬をあわててひきしめた。

銀行と反対側のデパートの壁に屋上から鮮やかな黄色の幟が下がっている。

《人間とは何か？
世界写真展「女」》

時間つぶしにはいいかもしれない。およそデパートの催し物など見る趣味も時間も持たない慧子は、まだ心を決めかねて銀座の歩道を歩いていた。

デパートの入口へ向う横断歩道まで来た時、丁度シグナルが緑になって、人々の群がいっせいに灰色の道を横切りはじめた。慧子もつられて流れに巻きこまれるように、ついと、人群の中にまぎれこんでいった。

一階の入口は天井から無数のパラソルが大輪の花のように舞い下がり、今年流行のスカーフが、熱帯の蝶の大群のように、それらのパラソルの間に薄い翅をひろげて乱舞している。ふきぬけの中央の広場には、電気仕掛けの滝が本物の水より冷たさをたたえてきらめき落ちていた。

本物の滝なら、飛沫にしとどに濡れそうな位置をエスカレーターが上下している。

慧子は化粧品や、ハンドバッグの売り場の間を抜け、まっすぐエスカレーターに近づいていった。このデパートのエレベーターの位置も知らないほど、慧子はこういう場所に普段は無縁なのだった。

「北見さん、慧子さん」

いきなり肩を叩かれてふりむくと、すぐ横に弓削燎子が立っていた。白地の夏大島に緑色の鮮やかな羅の帯を締めた燎子の姿は、まわりの人群の中でも、そこだけに光を集めたようなすがすがしさだった。

「さっきから見つけていたのよ。エスカレーターで降りながら、あなたが歩いてくるのを見つけたの」

いかにもなつかしそうにいう弓削燎子の声に、慧子は軽いとまどいを感じた。

「何年ぶりかしら」

慧子のつぶやきをすくいとるようにして、燎子がたちまち正確な答えを返してくる。

「六年、六年ぶりよ。エスカレーターの上でもあたし計算

したんですもの、あたしが中退して以来、お目にかかっていないわ」
そうだった。弓削燎子は女子大の三年の時、中退して結婚し、大阪へ行ってしまったのだと慧子も思いだした。在学中も、さして親しいという仲でもなかった。それでも相手の気持の弾みが反映して、慧子も次第にめぐりあった旧友に一種のなつかしさが湧いてきた。
「お茶でも御一緒したいわ」
という燎子に、慧子は人と待ちあわせているからと断わった。
「そう、じゃ、あなたのお電話教えて」
慧子はハンドバッグから仕事用の男のような大型名刺を取り出しながら、こんなに人なつこい人だっただろうかと、学生時代の燎子を思い出そうとしていた。美貌の点ではクラスでも目立つ方だったけれど、これという個性がなく、いつでもいるかいないかわからないような存在だった。
弓削燎子が中退した時も、格別、居なくなったことを、級友たちから淋しがられるというのでもなかった。
燎子は慧子の名刺を受けとると、
「あら、中野なら、遠くないわ」
といい、自分も名刺を取り出して渡した。
「主人ので悪いけど」
燎子からもらった名刺には大槻精一郎という名前が刷りこんであり、丸ビルにある法律事務所の住所と、荻窪の自宅の住所が並んでいた。結婚後の姓は大槻になっていたのかと、慧子はその名刺をハンドバッグにしまいこんだ。
「じゃ、あの、私、ちょっと急ぎますから」
慧子がもう癖になっている事務的な口調で、人との会合の切りあげ時に使う堅い声を出すと、燎子もあきらめたらしく、
「残念だけど……じゃ、近いうちにきっとね。あたくしの方からお電話さしあげてよ。よろしくって」
という。慧子は笑いながらうなずいておいてエスカレーターに飛び乗った。まだ下から見送っている燎子に頭だけは軽く下げて、慧子はすっと背をのばし、もうふりかえらなかった。
三階にエレベーターの扉口が見えたので乗りかえ、一気に八階の催し場まで上ってしまった。大槻燎子との不意の出逢いがしばらく心にひっかかっていたが、慧子はそれを自分からふり払った。
社会に出て、仕事をするようになってから、慧子はいつのまにか自分に必要な人間と不必要な人間との判別をす早くしてしまい、不必要だと思う人間とはなるべく深くつきあわないような姿勢をとっている。学生時代思っていたよりも、社会に出て働いてみると、生存競争のきびしさが骨身にしみ、とても無駄な人とのつきあいなどに時間をとられている閑はないと思ったことも理由のひとつだが、それよりも、須山竜夫との恋を秘かに育てはじめて以来、自分たちの恋をさまたげるあらゆる世間の妨害に抗い、恋を守ろうとする本能的な警戒心のあらわれでもあった。

――きれいな人だわ、学校時代より、もっときれいになってる。いかにも幸福の見本みたいな人……まあ、あたしとは無縁の世界の人ね――

慧子は、燎子の俤を払いのけると、真直、写真展の入口の方へ歩いていった。

受付でキップを買おうとして、慧子は目の前の壁にいきなり目を奪われた。

黒ビロードで張った入口の壁の上に全裸の女の寝ている写真が大きくひきのばされ、その上部の余白一杯に詩が書きつけられていた。慧子も名前は聞いている女流詩人の名が書かれている。字はやはり女流の書道家として名の聞えた人のものであった。

女讃歌

女　このいとしきもの
女　このにくらしきもの
女　この美しきもの
女　この醜きもの
女　この賢きもの
女　この愚かなるもの
女　この尊きもの
女　この浅ましきもの
女　この愛深きもの
女　この冷酷なるもの
女　この華やげるもの
女　この惨めなるもの
女　この万物の母
女　この万物の墓
　かぎりなくいじらしく
　かぎりなくあわれに
　かぎりなきふしぎひめ
　とことわに栄え地に満てる
女　この聖なるいのち

慧子の横で若いまだ少女めいたふたりづれの娘がその詩を仰いで口にだして詠んでいた。

「へえ、こんなの矛盾だらけじゃないの」

「だって、女って、矛盾のかたまりじゃないの」

「矛盾のかたまりは何も女にかぎってないわ、男だって、そうじゃない。うちのパパなんて凄いわよ」

ふたりの娘は肩を叩きつけるようにして、くっくっ笑い、ミニのスカートの下からすっきりとのびた脚を活発に運んで中へ入っていった。

慧子は、その詩を読み、やはり、心が捕えられた。まるで自分の内部に鏡をさしこまれたような気がした。

女に生まれたことは幸福なのだろうか。もし次の世で生まれることを選べるとしたら、自分はまたもう一度女に生まれたいと願うだろうか。

背後から押されるようにして慧子は中へ入っていった。世界各国のカメラマンの意欲作品を選びぬいたものだけに、そのどれにも迫力があり、一度は惹きつけられる。カメラマンの女を見る心がカメラの目になって、女を美しく

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

も、愛らしくも、また醜くも、浅ましくも撮ってあった。恋する女、出産する女、泣く女、銃をとる女、同性愛の女、春をひさぐ女、修道女……あらゆる女が、そこにいて、ため息をついたり、喜びや悲しみの涙を流したりしていた。

観ている客は男の方が多い。慧子は足早にそれらを見て回りながら、時々、時計を気にしていた。ずいぶん早く観たつもりでも、まだ半分もみないのに、たちまち須山竜夫との待ち合せの時間が近づいてきた。

思いきって後は見残し、慧子は出口へ急いだ。

約束の場所のレストランに着いたら、まだ五分前だった。慧子は入口から一目で見渡せるレストランの中をす早く見回してみて、須山竜夫のいないことを確かめた。そのまま、入口から引きかえし、廊下の脇の化粧室に入った。

洗面所の鏡に顔を映し、コンパクトをちょっと使い、口紅をひき直す。それだけで、鏡の中の慧子はいきいきとしてきた。小さな黄楊の櫛を使って、髪を直す。鏡の前から身をひくようにして自分の顔を見る。

目の下にうすく隈が浮んでいるのが気になる。昨夜、装幀の原画の直しがあって、考えがまとまらずほとんど徹夜したせいだった。出版社と、作者の意見がまるっきりちがっていて、慧子は出版社の注文通りに、派手で目立ち、売り易い装幀をしたのだったが、原画を見た本の作者からクレームがつき、もっと渋くてスマートなものにしてほしいというのであった。

「どうせベストセラーになる本ではないし、私の好きな作品だけ集めた短篇集ですから、品のいい、センスのある本にしていただきたいの、あなたの持ち味を殺したり、妥協したりしないで、好きなものを書いて下さいな」

作者の女流作家に電話でいわれたことばが耳にこびりついていて、慧子は昨夜一晩頭の中に石綿をつめたような気分だった。確かに、出版社の意図に迎合した面があっただけに、容赦のない相手のいいぐさがこたえて、負けず嫌いの慧子の心は傷つけられた。

あれだけ、注文をつけておきながら、出版社の係りは、まるでその装幀には自分はちっともタッチしなかったような顔をして、作家のいいなりになるのも口惜しかった。慧子はかえされた絵をひき裂くと、一晩中、新しい装幀のイメージを需めて苦しんだのだった。ようやく夜がしらしら明けはなった時、机にうつ伏してついうたた寝していた軀をおこし、はっと、気をひきしめたとたん、全く新しい本のイメージが目の前に浮び上がった。それから午前中かかって、絵を書きあげ、出版社にとどけてきた。

もしあれでクレームがついたら、あの仕事からはおろしてもらおうと決心している。今度のものは自分でも気にいっていたから、何といわれても後へひかないつもりだった。

昨夜からの疲れと気負いが、堅い翳(かげ)をつくっていて、まだきつい表情がのこっている。慧子は両掌で頬を強くこすりあげてみた。赤みがさしてきて、いく分柔らかな表情に

なった。
竜夫に逢えばたちまちなごんだ表情になるのを自分でも識っていた。
洗面所を出て、もう一度レストランの入口に引きかえし、今度は迷わず入っていった。硝子が天井まで入っている窓ぎわの向うのすみのテーブルで、竜夫がメニューをのぞきこんでいる。
前に立っても、竜夫はまだ気づかなかった。
慧子はテーブルごしに竜夫を見下して、気のつくのを待った。うつむきこんだ竜夫の濃い髪のつむじが左によって渦を巻いている。油気のない髪は思ったより柔らかくいつでも洗いたてのように軽く慧子の指にさらさらと触れる。つむじを中心に盛りあがったやや茶色がかった竜夫の髪を見おろしていると、慧子は指先によみがえる竜夫の髪の感触が熱い電気になって体内に逆流していくような気がした。もう八日、逢っていないのだと慧子はす早く計算していた。
慧子が数えている「逢う」ということは、竜夫と食事をしたり、酒をのんだりすることだけではなく、竜夫の腕の中で、濃い性愛のもたらす、あの甘やかな眠りを共有するということを意味していた。町で出逢い、一時間ばかりいっしょに話して別れるという逢い方ならば、一昨日の夕方にも逢った。
「何だ、いつ来てたの」
目をあげた竜夫がいう。慧子は答えないで竜夫だけに向ける微笑で顔中を柔らげながら、自分の椅子をひきよせた。
「何をたべる」
竜夫はまたメニューに目を落して熱心に検討する。朝、ミルクを一杯のんだだけだったのを慧子は思いだす。急に、空腹を感じ、胃の腑がむず痒いような気持になった。
「ぼくはビフテキ、慧はビーフシチュウかタンシチュウがいいよ。それからサラダだ」
慧子は安心しきってまかしてあった。まだ夕食には時間が早すぎたが、もうそれがふたりの夕食になるのはいつもの例でわかっていた。慧子はまかせきって、黙ってうなずいている。竜夫の選んでくれたものが、いつでも美味しかったのはこれまでの経験で証明ずみだったし、今日のおなかのすき具合では、何を出されても美味しくたべられそうな気がする。
いつでもこんな場合、竜夫は自分とちがった料理を慧子のために選び、皿が運ばれてくると、人目もかまわず、自分の皿の中のものを、慧子の方へ少しわけてくれ、ついでに慧子の料理をちょっと自分の方へひきうつすのだった。
ボーイに注文を仕終ってから、はじめて竜夫はまともに慧子の顔を見返した。
「どうしたの」
「どうしたの」
ふたりの同時に発した声が重なった。
竜夫の左のこめかみに赤い血の筋が走っていた。

「その傷」
慧子に指さされて、竜夫は自分の指で傷をなぞり、
「あ、これ、千春にひっかかれたんだよ」
という。
「この頃、むやみに癇がたって凄いんだ。あんなものかね」
慧子は仕事の時しかめがねを用いない近眼の目を見開き、もう一度、赤い傷を見直した。
三歳の幼女の千春の爪あとにしては、力がこもりすぎていると思ったけれど、慧子は細めた眼を柔和にまたたかせただけで、
「そうお、虫がおこってるんじゃないの」
といった。慧子は竜夫の長男の滋には逢ったことがあるが、その後に出来た千春の顔は見たことがなかった。慧子が竜夫とつきあう以前、既に生れていた滋に対して持つ感情と、竜夫との仲がぬきさしならなくなってから、妻が妊ったと聞かされた千春への感情には、自然、大きな差があって、今でも慧子は千春の名が竜夫の口から出る度、胸の奥に湧く感情を顔に出すまいとしてかすかな狼狽に捕えられる。話題を変えようとして、
「あたしがどうしたって」
と、慧子は竜夫の疑問の方へ問いをかえした。
「険の立った顔してるよ。何かあったのかい」
「ううん、昨夜寝てないからよ」
「どうして、仕事か」
「ええ……お直しなの、嫌になっちゃった」
それから慧子は昨夜の徹夜にいたるいきさつをかいつまんで聞かせた。話しているうちに、胸にもやもやたまっていた黒い煙のようなものが、みるみるすっきり晴れていくのを感じる。竜夫に聞いてもらうだけで、慧子の鬱憤はいつでも霧散してしまうのだった。
料理が運ばれてくると、ボーイが立ち去るのを待ちかねたように、竜夫がいった。
「今日はゆっくり出来ないよ」
「そう」
慧子の受ける声も軽かった。
竜夫は焼けた鉄皿の上で、じゅうじゅう音をたてているビフテキの上のバターをナイフの腹でつぶしながら、
「今夜、熱海まで行かなくちゃならないんだ」
という。慧子はまた軽く、
「そう」
といっただけだった。竜夫が、切りとったビフテキを二切れ、慧子のビーフシチュウのうけ皿の横へ置いた。ついでに、シチュウ皿の中から、とけるように煮こんだ肉を一切れフォークにつきさし、自分の口へ持っていった。
「うん、これはいけるよ。お食べ」
慧子はうなずいて、竜夫の動く口もとを見つめる。竜夫の白い大きな歯が肉を嚙みくだく度、竜夫のよく発達した顎が力強く動く。竜夫は如何にも美味しそうに物を食べた。竜夫の食べているのを見ているだけで、慧子は竜夫の

舌が味わっている味覚が自分の舌にも乗り移るように思い、口中に芳ばしい唾がたまるのだった。
「どうしたの、早くおあがりよ」
「ええ」
慧子は自分もナイフとフォークを取りあげた。
今夜、また竜夫が慧子とゆっくり愛しあう時間を持たないとすれば、もう何日自分たちは離れているのだろうと、頭の中で数えている。
「熱海はね」
竜夫の声が慧子の想いをたちきった。
「内田さんの別荘地を見に行くんだよ」
竜夫は肉を一切れ口に運んでおいて言葉をつづけた。
「内田さんて、画家の内田さんの」
「そう、伊豆山に別荘を買ったんだけれど、それをこわして、建てるんだ」
「アトリエですか」
「いや、純日本風の別荘にしたいんだって、あそこ、奥さんが軀が弱いから、奥さんのためのものらしい」
「へえ、しあわせな人ね」
「有名な恋女房だもの」
竜夫は食べる合間にビールをのみながら、機嫌のよい声で話しつづける。
父の代から建築事務所を持っていて、長兄の邦夫が事務所をつぎ、次男の竜夫が補佐していた。竜夫はもっぱら設計を受け持っている。邦夫は地味な性格で、この建築ブームにも調子に乗らず、手堅い取り引きをすすめているため、須山建築事務所は建築界で決して派手な存在ではないにしても、信用のある成長株と一目置かれていた。
事務所で設計に没頭している時の外は、比較的、自由な時間が得られるため、慧子との情事もこれまでつづいているともいえる。
「今から行って、そんなに遅くまでかかるの」
慧子はビーフシチュウの肉から脂身を切りはなしながら、竜夫の顔は見ないでいった。
「別荘を見るのはまさか夜までもかからないさ。今建ってるものをどう利用出来るか、土地がどうなっているかさえわかればいいんだから。ただしその後で、内田さんが、ぼくらを招待してくれるんだ。勿論、一軒ですまないだろう」
そこまで一気にいって、竜夫は、フォークをとめると、
「どうして、そんな訊き方するんだい」
と慧子の目を見つめかえした。
「ううん、ちょっと」
「おかしいじゃないか、仕事にいくんだよ」
竜夫の声がいく分、けわしくなる。
「だから、ちょっと訊いてみただけじゃありませんか。もし、今夜帰るなら、おそくっても待っていたいから」
慧子は声の調子をかえず、むしろ、静かにいった。
「……たぶん、帰れないね。帰っても、二時すぎるんじゃないかな」

「それでもいいわ」
竜夫が、また、慧子の顔を見直した。慧子にしては珍しい執拗さだった。
「何か、あったのかい」
慧子も、竜夫の目をじっと見かえした。
「いいえ、何も……でも、ずいぶん逢わないんですもの」
何だ、というように、竜夫の表情がとたんに爽かになった。
「馬鹿だな……ちょっと忙しかっただけじゃないか。潮ビルの方がもう片づいたから、少しゆっくり時間とるよ。一度、旅行でもしようか」
「ほんと?」
慧子は思わず弾んだ声で訊きかえす。
「北海道もいいね」
「そうね、でもこれからはこむんじゃないかしら」
「どこでもいいよ。北陸あたりもよかったんじゃないか。またいったっていいよ」
「そういえばずいぶん、ふたりで出ないわね」
慧子は感情を深く押えこんだ声でいい、この前の旅のことを思いだした。
竜夫と逢うことを、慧子は誰にも恥じていないけれど、竜夫の家庭を壊してまでいっしょになろうという気持がない以上、いつの逢びきの時も、人目を気にしていたし、いつ、露見して、竜夫の妻に乗りこまれるかわからないという怯えから解放されたことはなかった。
旅に出ると、そんな緊張や警戒から解き放たれ、慧子は安心しきって、竜夫への愛だけに溺れることが出来た。お互い仕事を持っている関係から、なかなか、時間があわせられない不便はあっても、一年に数回は旅に出ていた。
「どこか探しておいていいよ。慧の行きたいところ」
「ええ」
慧子は晴れやかな顔でうなずきかえした。
食事が終ると、竜夫は時計を見て、
「もう行かなくちゃ」
という。仕事で出かける竜夫を止められる筈はなかった。慧子もいっしょに立ち上がった。
東京駅まで慧子はせめて歩いてほしかったが、竜夫はタクシーをよびとめた。
「これからどうするの」
竜夫がはじめて車の中で気がついたように訊く。
「そうね。まっ直ぐ帰って、洗濯でもしようかしら」
「仕事はないの」
「空けておいたのよ」
せいいっぱいの皮肉だった。いつでも慧子は竜夫と逢うため、仕事はどんな無理をしてもその時間までに片づけてしまって、ふたりの時間の中には仕事を持ちこまないようにしている。
竜夫にむかって、仕事だから、時間がとれないとか、その日はだめだなどとはめったなことではいわなかった。
今日だって、これからのふたりの時間のために、完全に

空白にしておいた数時間を、どうやってひとりで埋めるべきだろうか。
竜夫はすぐには返事をかえさなかった。だまってフロントグラスを見つめている竜夫の表情は堅い。
気にいらないことがある時、竜夫は口をつぐんでしまって、不愉快さを誇示してみせる。
慧子は自分のことばがどんなふうに竜夫の神経にひびいたか充分識っていた。竜夫は仕事を持つ慧子をいたわる気持も、けなげだと思う気分も存分に持っていた。しかしその気持と仕事を、慧子が楯にしたり、剣にしたりして、竜夫に示すことを極度に不快がる気持は、矛盾しながらいつでも同居するものなのだった。
お互い口をつぐんでいる間に、車は八重洲口に着いてしまった。
駅の構内の雑踏の中を、大股の竜夫の後から、走るようにして着いていき、竜夫が切符を買っている間に、慧子は入場券を買った。
プラットフォームへ並んで出たものの、そこで手を振る気もせず、慧子は「じゃ」と小さくいった。
それまで黙っていた竜夫が、
「これからどうする」
さっきと同じことをいって、慧子を見かえった。
電車はもう入っていたので、乗りこみさえすればよかった。
「ちょっと買物して、すぐ帰るわ」
「その方がいい、早寝した方がいいよ。疲れてるんだから」
そんなやさしい口のきき方をされるから、あきらめきれないんだと、慧子は心の中で竜夫のことばをかみしめた。
竜夫が電車に入るのを見届けてから、慧子は階段を下りていった。竜夫のことばのせいか、急に昨夜からの疲れが全身に滲み出してくる。一刻も早く帰りたくなって、地下鉄の方へ道をとった。
地下鉄は思ったより空いていて、慧子は出口に近い席に坐ることが出来た。腰をおろすと、たちまち、湯のようなあたたかさで、睡魔が襲ってきた。瞼がおちてくると、目の中に別れたばかりの竜夫の顔がひろがってくる。
今夜、来たら、いうつもりだった話題が、胸に浮び出てきた。
——あんまり固苦しく考えないで、とにかく一度逢ってみたらいいと思います。津村様はおだやかな性格の方だから、決して、あなたに失礼なことをいったり、不快を与えないと思いますから……その上で、お互いが、もう子供じゃないのですから、判断しあっていけばいいでしょう。繰りかえしていいますが、決して、私たちは、この話を是が非でもとすすめているのではないのですよ——
今朝受けとった故郷の伯母の手紙は、膝の上に置いた仕事かばんの中に入っている。
伯母や、知人から、しきりに縁談をすすめられたのは、三、四年前までで、この二、三年は、ぱったりと、火が消

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com